

# 学歴社会イメージと不公平感

## —「教育と社会に対する高校生の意識」調査の時系列分析—

阿部晃士（岩手県立大学）・海野道郎（東北大学）

### 1. 問題の所在

本報告の目的は、1980年代後半から実施してきた継続調査のデータにより、高校生が抱く学歴社会に対するイメージの変化を記述し、その意味を探ることにある。

1980年代以降のさまざまな社会調査で、社会の公平性に関する質問がおこなわれており、そうした調査の結果からは、1990年代後半までの日本社会で、「性別による不公平」「貧富による不公平」等、ほとんどの領域で不公平感が高まっていること、また一貫して「学歴による不公平」の指摘率が高いことがわかる（間淵 2000）。

近年の社会の変化は、高校生の社会イメージや不公平感のような社会評価に、どのように関わっているのだろうか。また、それらと本人の置かれた位置（学校、親の地位等）はどのように結びついているのだろうか。日本では学業達成の低い層を中心に学歴を否定する意識が浸透しているとの知見もあるが（中村ら 2002）、そのような変化を見出すことができるか検討したい。

### 2. データ

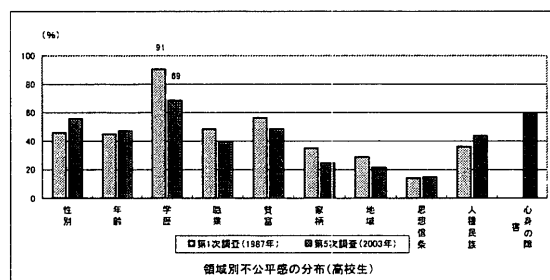
分析に用いるのは、東北大学教育文化研究会（現会長：片瀬一男・東北学院大学教養学部教授）による一連の共同調査「教育と社会に対する高校生の意識調査」（対象は高校2年生とその両親）のデータである。このうち第1次（1987年）、第3次（1994年）、第4次（1999年）、第5次（2003年）の調査は、仙台圏にある高校を対象として

おり、対象校の一部は異なっているが公立・私立、共学校・別学校、普通科・職業科、進学校・非進学校などのバランスを考慮している。したがって、今回の分析には、すべての時点で共通の対象校ではなく、各回の全高校（十数校、千名強）のデータを用い、主に高校生の意識に関する分析をおこなう（対象校に高専が含まれた場合については、高専を除いている）。

なお、第4次調査までのデータを分析した木村（2003）は、高校生ではなく親の方に「学歴社会イメージ」離れの傾向が見られることを示しているが、ここでは、第5次調査までのデータを用いて高校生の意識を中心に分析することとする。

### 3. 分析

領域別不公平感（図に示したそれぞれの領域について、複数回答で不公平があると思うか否かを尋ねたもの）の分布を見てみよう。第1次調査と第5次調査を比較すると「学歴による不公平」を挙げた高校生の比率は、91%から69%に減少している。2時点間で増減している領域は他にもあるが、「学歴」に関する不公平については、特に



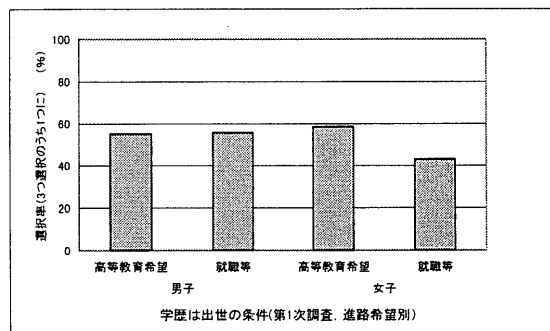
変化が著しいことがわかる。では、なぜ、「学歴による不公平」感が大きく減少したのであろうか。

その間に答えるものとして、「学歴社会に関するイメージ」の変化が、学歴による不公平感の減少をもたらした」という仮説が考えられる。ここで学歴社会とは、高学歴を取得することがその後の地位や所得などの資源獲得を強く規定する社会を意味している。また「学歴社会に関するイメージ」とは、社会がそのようなものであるという信念を人々が抱いていることである。そこで、(予測1)このような信念が人々に広く存在しているならば、(学歴が資源獲得を規定することが望ましくないと考える人々を中心に)学歴による不公平感は増大するはずである(織田ら 2000)。逆に、学歴による不公平感が減少したことからは、「学歴社会に関するイメージ」が希薄化したことが予測される。また、(予測2)「学歴社会に関するイメージ」が希薄化するならば、高校生が進路選択するに際して、高学歴達成による地位達成を動機付けとすることは少なくなるだろう、と予測できる。

では、実際にはどうであろうか。

「予測1」に関しては、第1次調査と第5次調査では質問が異なるので単純な比率の比較はできない。

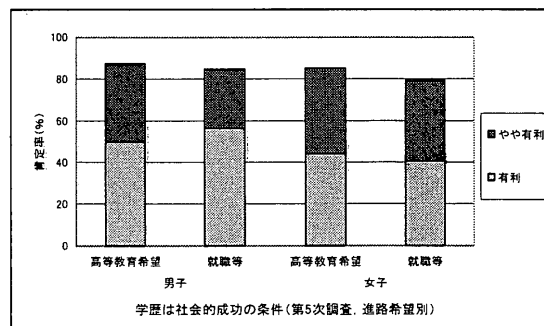
「予測2」については、性別・進路希望別の違いに注目して検討してみよう。



第1次調査では、男子で進路希望による違いが見られないのに対して、女子では高

等教育への進学を希望している者の方が「学歴社会イメージ」を持っている。女子で高等教育進学を希望していない層は学歴の効用を認識していないということになる。

一方、第5次調査では、男子でも女子でも、進路希望による学歴社会イメージの違いはほとんど見られなくなっている。



以上から「学歴による不公平感」の低下の原因として「学歴社会イメージ」の希薄化という過程が女子については存在していることが示唆される。当日の報告では、この2時点の間に実施した調査のデータも用いて検討を加える。

## 引用文献

- 木村邦博. 2003. 「高校生の目に映る『学歴社会』—宮城県での継続調査から」(東北文化公開講演会配布資料).
- 間淵領吾. 2000. 「不公平感が高まる社会状況は何か—公正観と不公平感の歴史」海野道郎(編)『公平感と政治意識』(日本の階層システム 2) 東京大学出版会 151-169 頁.
- 中村高康・藤田武志・有田伸(編著). 2002. 『学歴・選抜・学校の比較社会学—教育からみる日本と韓国』東洋館出版社.
- 織田輝哉・阿部晃士. 2000. 「不公平感はどうのように生じるのか—生成メカニズムの解明」海野道郎(編)『公平感と政治意識』(日本の階層システム 2) 東京大学出版会 103-125 頁.